



OSCNI乗りもの対談シリーズ ^わすてきな輪だち

自転車をはじめ、さまざまな「乗りもの」を愛する方々をお招きし
「乗り物文化」の未来を語り合います。

第5回 「スポーツバイクのおもしろさと交通安全意識」



伊藤センター長（右）と片山（OSCNI代表）

ゲスト講師

伊藤 嘉康

豊田市交通安全学習センター センター長
愛知県弥富市出身



Toyota City Traffic Safety Learning Center
豊田市交通安全学習センター

スペシャルゲスト

ドバツツ ライノハウス社長 斉場孝由



聞き手 : OSCNI代表 片山 昇
対談日 : 2017年12月
場 所 : 愛知県尾張旭市

スポーツバイクの体験

片山： 本日は、尾張旭にお越しいただき、サイクリングをご一緒しました。いかがでしたか。

伊藤： ロードバイクで、これだけの距離（15 km）を走行したのは、初めてです。風が気持ちよく、気分爽快でした。そして、様々なことを感じ、考える機会となりました。

尾張旭をロードバイクで



溪流沿いをマウンテンバイクで

片山： 夏には、マウンテンバイクで走行しましたね。豊田市の山間部の溪流沿いを、OSC Nスタッフ数名と一っしょに。溪流で足を冷やしたり、鮎料理に舌鼓をうったり・・・。

伊藤： マウンテンバイクで未舗装路やアスファルトの山道を走るのは、初めてでした。交通量の少ない道路で眺めも素晴らしく快適なルートでした。

そして、自転車の特性を把握した走行を心掛けるということも理解することができました。

例えば、路面やカーブ先の状況、路面に落ちている枝葉を考慮に入れたライン取り。そして、それに合わせた速度調整。

また、マウンテンバイクは、タイヤのサイズが太く、比較的、気軽に乗れる乗り物ですが、体に合わせて自転車の調整をすることの奥深さを味わうこともできました。

サドルやハンドルの高さなど、自分に合わせた調整をしてみると、筋肉痛の部位が、今までとは異なりました。大腿筋の負担が全くなくなりました。一方で、首や肩が張りました。シートポジションをもう少し、見直す必要があるのかもしれませんが。

いずれにしても、自分の体に合わせるということが、重要だということを知りました。

片山： マウンテンバイク、ロードバイクなどのスポーツバイクを体験して、自転車に対するイメージは変化しましたか？

伊藤： 長い間、自転車は移動手段として、気軽に利用できる乗り物、というイメージでした。

仕事上、交通ルールの側面から自転車を考えることはありましたが・・・。

今日は、ロードバイクで交通量の多い車道、市街地を長時間走行しました。風は気持ちよく、気分爽快でした。

しかし、正直なところ、車道を走るのが怖い、とも感じました。

事前に、危険個所を教えてもらったので、安心感がありましたが、一人で、交通量の多い車道を走っていけるかという、不安ですね。

公道をはしる

伊藤： マウンテンバイクで溪流沿いをサイクリングした時は、他の乗り物や人が、あまりいない環境でした。

今日は、ロードバイクで市街地走行。自動車・人・自転車・バイクと、たくさんの交通参加者がいる環境に、自転車で入っていくという感覚でした。



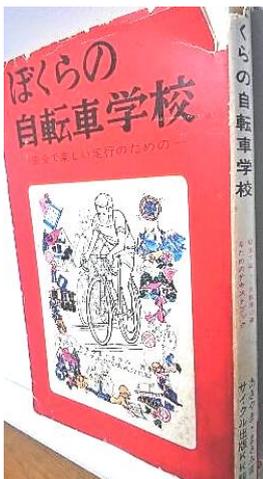
片山： 公道において、どのような心構えで、乗り物を利用するのか。それは、様々な交通問題のキーポイントだと思います。

伊藤： 自転車の運転については、自動車の免許のような法的根拠があるわけでは無い。何歳からでも、また高齢になっても乗ることができる。

今日も、畑まで、自転車で出かける92歳の方にお会いしましたね。

片山： 約50年前の本が手元にあります。

昭和44（1969）年発行、『ぼくらの自転車学校 ～安全で楽しい走行のための～』
—安全で楽しく自転車に乗るためのテキストブッカー（あきやまさまみ著・サイクル出版株式会社発行）。
最初のページにこんな記述があります。



「わが国では、現在ざっと2、800万台の自転車が走りまわっていると推定されています。（※）日本人の3人に1人は自転車に乗っている、という計算です。・・・おどろきは、3、000万台近い自転車が、まるで野放し同然で、自転車に乗っていた小中学生が、大型自動車にはねられる事故などが、毎日のおこり、自転車に乗っていた人の死亡事故件数が、歩行者の死亡に次ぐ数字になっていることです。交通事故死者の約7人に1人は、自転車に乗っていたのです。このような事実があるのに、自転車を楽しく、安全に運転するための指導は、全国規模では行われていませんし、そのための法律はあっても、よく知らない、知ってはいるが、守ったり守らなかったり、という人が、平気で自転車を乗りまわしています。このままなんの手もたずにおいて、いいものでしょうか。」

（※）2018現在、日本の自転車保有台数は約7、000万台

当時、自転車の保有台数が伸びていた時期です。そして、現在も50年前と変わらず保有台数が伸び交通問題も依然として、山積したままです。

自転車レースで世界を極めた元選手から、こんなことを聞いたことがあります。

「自分の技術だけ高くても、公道では安全とは言えない。公道には、さまざまな交通参加者がいる。まわりのことも、よく考えて、自転車の運転をしないといけない。」

公道では、常に緊張感を持って運転していないと、どんな自転車でも安全には走れない。独りよがりではいけない。

日本人の交通安全意識

伊藤：先ほどの50年前の本のように、安全意识を高めて乗ってもらうための本、ロードで街の中を安全に走るためには？というような本は、現在あるのですか。

片山：自転車誌は、10誌余り出版されていて、その中の特集でも時折、目にします。ただし、内容が伝わる範囲が、自転車愛好者に限られてしまいます。

だからこそ、公教育や、社会教育の場で、交通参加者の当然の知識として、自転車の運転ルールやマナーそして、基礎的な技術を学べる機会を増やしていく必要があると感じています。

自転車販売店の中には、安全な乗車技術とマナーやルールを購入者に伝えているところもあり、たいへん効果的だと思います。

伊藤：出張でイギリスに行った時のことですが、大人でも自転車のヘルメット着用者が多かったのには、とても感銘を受けました。

日本でも、さまざまな場面でのヘルメットの着用教育が必要だと痛感しましたね。

片山：たしかに、そうですね。私も、ベルギーのブリュッセルに行った時に、全く同じことを感じました。次に、豊田市交通安全学習センターについて、うかがいたいと思います。

命にかかわる教育

片山：開所して、8年目の豊田市交通安全学習センター。

休日は、親子連れで賑わい、平日は、校外学習の児童たちが、たくさん訪れていますね。

伊藤：これまで、学校教育との連携分野では、市内の全小、中学校を対象に、交通安全教室を実施してきました。中学校については、こちらが学校に出向き、1年生の皆さんに講話や自転車の乗り方の安全指導をします。

小学校については、4年生の皆さんがセンターに来て、交通社会を模した市街地ゾーンで、体験的に交通社会での安全な行動を学びます。送迎はバスで行います。



センターは、豊田市の施設を、豊田交通教育株式会社（※）が、受託管理しています。

（※）豊田交通教育株式会社の構成企業：日本道路（株）・矢作葵ビル（株）・（株）乃村工藝社・トヨタ中央自動車学校

交通安全教育という分野は、効果がすぐに、あらわれるものではありません。しかし、他者と自分の命に関わる大切な教育。1回やれば十分、というものではありません。

子どもの発達段階に応じて、複数回の段階的な教育が必要だと思います。そのために、保護者を含め、小、中学校の皆さんがセンターで学習する機会が、現行よりも増えること、それが私の理想です。



本物そっくりの市街地ゾーン

ジオラマで学ぶ

片山： ミニカーを使った、大きなジオラマがありますね。

伊藤： 「きけん！あんぜん！はっけんタウン」のことでですね。

市街地で想定される危険箇所や場面をトミカで再現してみました。

ミニカーのトミカタウンを見るだけでなく、危険場面を見つけ出しながら学んでもらいたいという目的です。

例えば、道路で遊んでいる子ども。自転車の傘さし運転。車から降りる時に右側から降りている。そんないろいろな場面から、なぜ危険なのかを考えるためのコーナーです。

制作は、メーカーに協力を依頼しました。

本当は、事故の状況をリアルに再現したかったんです。

例えば、事故の衝撃で変形してしまった車とか。

なぜかという、交通安全教育は命に関わることからです。

しかし、企業イメージもあり、メーカーから、それは出来ません、と言われて断念しました。



なぜ危険なのかを考える

「ちゃんと止まるのよ。」

伊藤：新しいものでは、高齢者向けの「道路横断シミュレーター」なども導入しました。これは、センターのオリジナル版として、メーカーに改良してもらい、チャイルドビジョン目線も体験できるようなシステムにしました。

高齢者のみならず、小さな子どもをお持ちの保護者の方にもぜひ、体験して頂きたいですね。

片山：室内に、新たな体験スペースが誕生していますね。

伊藤：センターは、室外で体験するものが多いので、天候に左右されます。そこで、室内でも、交通安全教育が体験的できるようにと、「ちびっこうんてんひろば」を増設しました。

信号もある小さな町をプラズマカーで走ります。貸し出しの前には、きまりがあります。

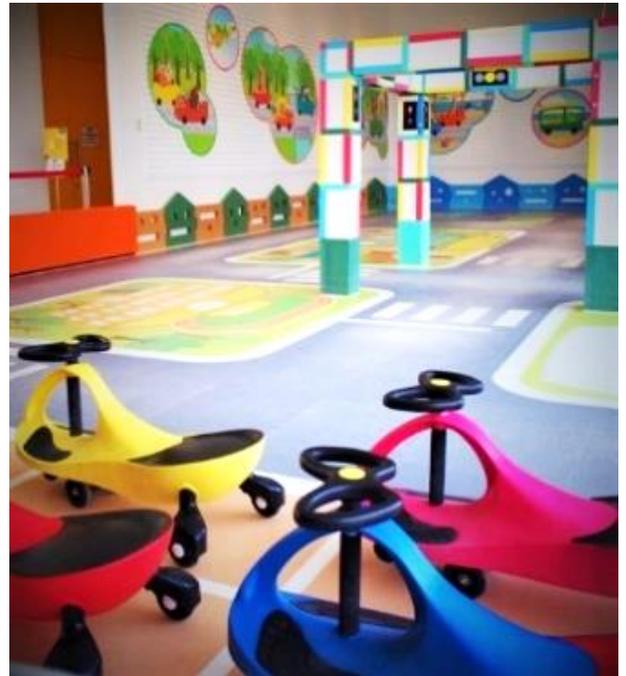
『 問いかけ本 』があって、

「 赤信号では、どうする？ 」

「 ほかに車がいた時は、どうする？ 」

そういったことを、親が子どもに問いかけ、教えてから、コーナーに入場してもらうというきまりです。

スタッフからは「お父さんお母さん、ぜひ、中に入って声がけて下さいね。お子さん、信号で止まりますかね。」というふうにお声掛けしています。



ちびっこうんてんひろば

片山：私も、興味深く見ていたのですが、子どもの動きに気を配り、声がけをしている親の姿がありました。「ほら、そこ。信号が赤でしょ。ちゃんと止まるのよ。」とか。

中には、他の親に触発されて、声がけをし始める方も見えました。こういったよい連鎖がひろがるといいですね。

伊藤：親から子に伝える交通安全教育の場として、センターを積極的に活用して頂きたいですね。



体験するOSCNSタッフ 寺尾さん

あぜ道で競争

片山：伊藤さんの自転車との出会いについてお聞きしたいと思います。

伊藤：とにかく、自転車大好き少年でした。

小学生の頃、中古のBMXを買ってもらって、友達と田んぼのあぜ道で競争。公園から家まで、どっちが速いか……。交差点で転倒して、骨折したこともありました。(苦笑)

片山：水泳で国体に出場し、メドレーリレー（平泳ぎ）で5位入賞をした経験もあるスポーツマンの伊藤さん。

教習所の指導員になるきっかけは、何だったのですか。



伊藤さんと自転車
センターの市街地ゾーンにて

水泳選手から教習所教官に

伊藤：小学生の頃から、スイミングスクールに通い、中京大学のスポーツ学科では、水泳の選手として励みました。一時は、消防士を目指したこともあります。

転機は、大学在学中に、将来の役に立つのではと、大型運転免許取得のために自動車学校へ入校したことです。そこで、お世話になった教官に、教習所での教官の道をすすめられました。

それが、現在の所属先であるトヨタ中央自動車学校です。

ヒヤリハットの経験

片山：オートバイの経験もお持ちなのですか。

伊藤：教習所に就職してから、オートバイの免許を取りました。

公道での運転経験が少なかったので、当時はやりの、ビッグスクーターを購入して乗るようになり、乗車機会が増えるにつれて、さまざまなヒヤリハットも体験し、ライダーとしての当事者意識も高まりました。

27歳の時には、教官仲間と北海道ツーリングをしました。

往復のフェリーも含めて4泊5日の旅程。小樽→宗谷岬→名寄→函館→小樽と、かなりタイトなスケジュール。「ひたすら走る」ツーリングを経験しました。若かったですね。(笑)

風圧やスピードが体に及ぼす影響、極度の疲労感、集中力の欠如なども経験。それらの運転への影響なども実体験することができました。

こういった経験は、生きた知識となっています。やはり、公道という交通社会での体験的な学習も欠かせないと考えています。



豊田市交通安全学習センター
屋上からの眺め

ドバツツ ライノハウス にて

尾張旭をサイクリングしている途中に、自転車工房
ドバツツ ライノハウスへ立ち寄りしました。
社長の斉場さんは、OSCNじてんしゃスクールの
理事並びに整備顧問でもあります。



尾張旭にある自転車工房 ドバツツ ライノハウス

乗り手しだい

伊藤： 長年、自転車づくりをされている斉場さんの立場から、今後、自転車という乗り物がどのように変化していったら、より快適に利用できるようになる、と思いますか。

斉場： 自転車は、現状、自動車みたいに自動制御というわけにもいきませんよね。
最終的には、人の安全意識や操作に委ねるしかない。



もちろん、インフラを整備することで、自転車がより快適、安全に社会の中で利用されるようにしていくこともあります。
自転車という乗り物についても、現在の世界を見ていると、スピードを出して走りたい人もいるし、のんびりと走りたい人もいます。そのあたりを、うまくミックスできるようなインフラにしていく必要があると思うんです。

最近、世間でよく耳にするのが、このタイプの自転車は危険だとか、これは安全だとか、という議論です。
自転車のタイプによって闇雲に危険視するのは、おかしいと思います。使う人の使い方次第、乗り方次第ですよね。いろいろなタイプの自転車があって、いろいろな楽しみ方ができるのが、自転車だと思いますけどね。

だからこそ、マナーアップが大切だと思います。

私もお手伝いしている、「OSCNじてんしゃスクール」の活動も、自転車の乗り手の心構えを育てるという意味で大切だと思うんです。

親が、子どもと楽しく、そして、安全に配慮して自転車に乗る姿勢を見せていけば、子どももそれをお手本にして、楽しく安全に自転車に乗っていくと思うんです。

そのあたりは、これからの自転車を取りまく日本社会で改善すべきところですよ。親世代の教育が必要となってきているように思います。

自分自身の反省もあります。かなり、いい加減な乗り方をしてきた部分もありました。けれど、今は心を入れ替えて（一同笑）、交通ルールを意識して乗るようになりました。

お客さんを、サイクリングにお連れするときも、自分がお手本を見せることを心がけています。

私が、一時停止のところで、ちゃんと止まれば、お客さんも、それを見習って止まる。

誰かが、きちんとした行動を交通社会でとれば、一緒にやってくれるんですよ。親が、マナーやルールを守れば、子どもも見習って守るようになる、それと同じだと思うんです。

ドライバーに自転車の視点を

齊場： 自動車の運転免許更新時に、自転車の乗り方についての教育機会を十分にとったら良いのではと思うんです。大変な数の大人が受講するわけですから。車のドライバーが、自転車に乗っている人の行動や気持ちを理解することで、交通事故が減り、安全快適になるような気がするんですけどもね。

片山： いっそのこと、自転車に乗る教習も必修としたらいいのでは。

自転車の交通ルールの確認にもなるし、他の乗り物の理解にもつながりますよね。

他者の視点を、客観的に理解できることは、交通社会において欠かせない能力だと思います。

ダンロップさんは、すごい



話に興がる伊藤さん（左）と齊場さん（右）

伊藤： 自転車の機能面からの「安全」ということもあるのでしょうか。「パンクしないタイヤ」というのもありますよね。

齊場： 販売されていますね。でも、パンクしない反面、重さがあったり快適さを損なってしまっていたりということもあるんですよ。今の技術では、軽くて、しかも、パンクしないというタイヤは無いですね。

それを考えると、空気の入ったタイヤを開発したダンロップさんは、すごいなあと、感心してしまうんですけどね。

以前と比べ、道路の路面状態がよくなっているとはいえ、自動車と比べると、タイヤの厚みも薄いことから、パンクすることもあります。だからこそ、日頃から、自転車の整備を行うことが、とても大切なんですよ。空気の入ったタイヤは、いいもんですね。微調整もききますしね。

自転車競技の世界でもそうですが、路面状態に応じて、少し空気圧を変化させてあげるだけで、タイヤと路面との接地感が変化してきますもんね。

片山： なるほど、安全に快適に走るためには、タイヤの空気圧に敏感になることも重要、ということですね。最後に、伊藤さん、今後の展望をお聞かせください。

伊藤： 豊田市交通安全学習センターの周辺は、地理的条件が良く、サイクリングなどを楽しむ自転車愛好家も多く見かけます。そういう方々に、休憩がてら、気軽に、センターに立ち寄ってもらいたいですね。そして、交通安全への意識を高めてもらえたらいいな、と思います。これからは、スポーツバイクを楽しんでいる方々にも集まってもらえるような場所づくりも視野に入れていきたいですね。そのためにも、私自身が、自転車の世界をさらに学びたいと思っています。

片山： ドバツツ ライノハウスさんには、突然、おじゃましましたが、話に夢中になり、あっという間に時間が経ってしまいました。

伊藤さん、齊場さん。長い時間、おつきあいいただき、ありがとうございました。